

特別記事

ユニークな活動と人に支えられた楽しい会

～二期目を始めるにあたって～

嶺重 慎（京都大学）

1. はじめに

今年度、会長に再任されました嶺重です。あらためて、よろしくお願ひいたします。

さて、立候補をするにあたり、次のような文章を掲げました。

「当会は、各地でいろいろな活動をおこなっているメンバーで成り立っています。もし選ばれましたら、継続して以下の2点に留意しつつ、会員のために働きたいと思っています。

一つは『地道な活動から』。草の根的な活動を大切に、さまざまな立場にある会員がきもちよく活動を展開できるよう、年会・支部会や『天文教育』誌を中心として盛り上げていきます。もう一つは、『天文関係の諸団体との連携』。本会独自の活動を展開するとともに、関連する諸団体との連携を密にすることで、日本の天文教育研究コミュニティ全体の発展に貢献します。」この2点、じつは2年前に「会長抱負」[1]として掲げたものとほぼ同じで、そういう意味で進歩はないのですが、二期目を始めるにあたり、あらためてこの2点にこだわり、さらに徹底していききたいという思いを強くしています。以下に具体的に述べます。

2. 地道な活動から

本会は、さまざまのバックグラウンドをお持ちの方が、それぞれの立場から多彩な活動を展開されている、極めてユニークな組織といえます。会もユニークなら、会員もユニークな方がそろっています。

考えてみれば、これは不思議でかつ有難いことです。職種も、住んでいる場所も活動する場所も、年齢も様々の方が「天文教育や

普及が好き」という1点を共通に集まってきているのです。

過去2年間、私はできる限り支部会に参加すべく努めてきました。九州支部だけは残念ながら今まで機会がありませんでしたが（今年は初参加できそうです）、ほかの支部会は複数回、参加することができました。

そこで実感することは、支部会ごとに独特の色がついているということです。関東と近畿は、人が多いのでミニ年会という感じになり、多くの講演を楽しめますが、地方では、出席者を集めるのも楽ではありません。その困難な中で、支部委員をはじめ有志の方々が、地元の観望会グループにもまめに声をかけるなど大変な努力をされて、支部会を実現しておられます。会では、講演数は多くないのですが、逆にそれが強みで、質疑の時間を十分にとることができます。意見・情報交換を心ゆくまで楽しむことができるのです。こうした特徴を活かし、支部委員の方々が地方独特の雰囲気、といっても独善・排他的でなく、新来会者にも居心地のよい独特の空間を創造しておられます。このことは会員のみならず、強調しておきます。機会があれば、地方の支部会にも顔を出されてはいかがでしょうか。

合わせて「天文教育」誌もさらに充実させていきたいと考えています。具体案はこれからですが、支部会のもつ雰囲気がうまく「天文教育」にも出せないかと、松村編集委員長とも相談していきます。

3. より強固なネットワーク形成のため

本会は「天文教育普及活動をする人たちの集まり」だけでなく、「天文教育普及活動を

する人たちをサポートする集まり」にもなるべきです。そのためにも、草の根的な活動の全国ネットワークの形成のため、さらにお手伝いができたらと思います。

今は、分野間の競争の時代といわれます。活動する人の集まり（コミュニティ）全体がまとまって活動展開や社会への広報をできる分野が発展し、そうでない（互いに足をひっぱるような）分野が衰退していく時代というのです。われわれは、決して後者になってはいけません。天文コミュニティの総力をあげて、活動・発信に心がけていかななくてはなりません。その点において、本会の果たすべき役割は大きなものがあります。

「天文教育普及活動をする人たちのサポート」という点では、日本天文協議会という組織があります。これは、天文教育関連の組織で、日本天文学会、本会、国立天文台、宇宙航空研究開発機構、日本プラネタリウム協議会、日本公開天文台協会、日本天文愛好者連絡会、星空を守る会が属しています。ただ、この日本天文協議会、2011年に発足したものの、それを支える資金はなく組織も盤石とはいえ、その組織自体が活動を主導することは難しいように個人的には思います。

とはいうものの、今回の日食関連の記者会見など、文部科学省や外部組織と折衝する場合は、コミュニティ全体を包括する組織があることは、重要です。そこで、全体の枠を尊重しながら、実質的な活動は本会が主導していくスタイルで、うまく協働していくのがいいのではないかと考えています。

4. まとめにかえて

2012年度の年会は和歌山で開かれました。尾久土さん、富田さんら実行委員会の方々のご尽力により、107名もの参加を得て、盛大に行われました。その年会、印象深いことが多くありましたが、中でもうれしかったこと

は、招待講演をしていただいた加茂昭さんの懇親会におけることばです。

「こんな楽しい会は無いです。私は1泊だけで失礼しようかと思っておりましたが、あまりにも楽しいので、もう一泊します。」

加茂さんは、そうおっしゃって、また、本会に入会していただきました。

執行部を1期務めさせていただいて、ますます実感を強めていることの一つは、本会に属する人々の人間的魅力です。社会のため、日本のため、天文を愛する人々のため、無償で、一生懸命に活動しておられる方が、本会にはたくさんおられます。特に、2012年金環日食日本委員会の皆さんの活動には、頭が下がる思いでした。われわれ執行部もそうした会員の姿に大いに励まされました。本会を支えているのは、会員の熱い思いとユニークな活動であることがよくわかりました。

本会を、さらに「楽しい会」とし、さらに人と活動の環を広げていくために、微力ではありますが、貢献していきたいと思えます。とはいえますものの、会長、あるいは執行部の力は限られています。みなさまがたの協力無しでは、決してその重責を担うことはできません。ご理解とご協力をあらためてよろしくお願いいたします。

参考文献

- [1] 嶺重慎(2010)「天文教育」9月号(Vol.22 No.5)